

インドの四月は、もう強烈な炎暑だ。今回のインド行きは、インド外務省とインド文化交流協会(ICCRC)の招きによる講演旅行であったが、「中国の内政と国際関係」と題する私の講演に、インドの知識層があれほどの関心を示してくれようとは思っていなかった。とくに印象深かったのは、ニューデリーの国際文化センターとケララ大学の講演であったが、前者は百数十名の学者や外交官、ジャーナリストが会場にあふれ、熱気のある質問が深夜まで続いた。インド最東部のケララ大学では、日本人学者の初めての講義だそうで、中国問題を勉強したいという学生が必死にノートをとって聞き入ってくれた。

街の表情似た両国

それほどまでに今日のインドは、中国の行方に強い関心をいれている。というよりも、北方の巨人であり宿命的なライバルである中国が、近代化へ向けて本格的な離陸を始めたことに、大きな脅威を感じているといってもよい。その中国がソ連と厳しく対立しているかぎり、脅威感は薄らぐであろうが、最近の中印関係の改善は、インドにとって座視し得ないものになっている、というあたりにイ



ンドの当面の中国認識の根本があるといえよう。

私にとってインドは十年ぶりであったが、旅行中考えつづけたことは、インドと中国という、アジアの二つの超人口大国の近代化・工業化という課題の比較であり、その対称性であった。

オールドデリーの街中の車と

インドと中国 大いなる対称性

アジアの超人口大国の近代化・工業化

バイクのあの耳をつんきく喧嘩(けんま)は、最近の北京の表情に似ている。イギリスがそこから上陸し、また撤退していったボンベイは、街のたたずまいも上海を想(おも)わせる。バナナ、椰子(やし)、水田の多いケララ州は、真紅のハイビスカス(中国では大紅花とい



中嶋 嶺雄

なかじま・みねお 一九三六年長野県松本市生まれ。東大大学院(国際関係論)修士。著書に『現代中国論』『中印対立と現代』『北京烈火』『香港 移りゆく都市国家』など。この五月には日仏共同研究をまとめた編著『中国の戦略もしくは竜の変身』がパリで刊行された。

困難抱え急速に離陸

宗教や血縁などが拘束に

と(岩波新書)を著した六〇年代初頭までは、基本的に維持されていたといつてもよいだろう。すでに中印紛争で、バンドン精神には大きな亀裂が入ったとはいえ、ケララに出現した共産党州政府がインドと中国の架け橋になるだろうと見られたこともあった。

なかに、その後の過程は、中印間の対立の深化のみならず、中国の文化大革命、インド型社会主義の揺さぶによって、希望の星はいずれも光を失い、一人当

の導入に突き進んでいること、そのあらわれであろう。世界銀行やIMFの統計に見るかぎり、国内総生産(GDP)に占める第二次および第三次産業比率や重化学工業化率、高等教育就学率、電話の普及率などはインドの方が高いのになら、投資効率、一人当たり

の導きの社会的な共同原理が「四つの現代化」という国家目標を社会の底辺から垂直的に引くはるかたちで、その「速心力」を強めている。しかも、二二世紀にこの二つの大国は、双方あわせて三十億を優に超える人口をもつことになったとい

り、その後の過程は、中印間の対立の深化のみならず、中国の文化大革命、インド型社会主義の揺さぶによって、希望の星はいずれも光を失い、一人当

の導入に突き進んでいること、そのあらわれであろう。世界銀行やIMFの統計に見るかぎり、国内総生産(GDP)に占める第二次および第三次産業比率や重化学工業化率、高等教育就学率、電話の普及率などはインドの方が高いのになら、投資効率、一人当たり

の導きの社会的な共同原理が「四つの現代化」という国家目標を社会の底辺から垂直的に引くはるかたちで、その「速心力」を強めている。しかも、二二世紀にこの二つの大国は、双方あわせて三十億を優に超える人口をもつことになったとい

の導きの社会的な共同原理が「四つの現代化」という国家目標を社会の底辺から垂直的に引くはるかたちで、その「速心力」を強めている。しかも、二二世紀にこの二つの大国は、双方あわせて三十億を優に超える人口をもつことになったとい

かつて一九五〇年代、インドは中国とともに、アジア・アフリカ新興独立国のチャンピオン

ま、近代化・工業化の道を進みつつあることの証明でもあろう。しかし、このような比率をい

私は、このような途方もない比較にとられながら、インド亜大陸南端のゴマリン岬に立つて、アラビア海とベンガル湾とインド洋とが合する波濤(はたう)を眺めていた。原地語(マラーヤラム語)で「カニヤ・クマリ」つまり、永遠の処女(という意味の聖地でもあるこの岬の近くにあって、異教徒は原則として禁断だというカニヤ・クマリ寺院にヒンズー教徒の白衣をまとい、上半身裸にな

聖と俗織りなす地
インドが古代をそのまま現代に接ぎ木したような宗教国家である半面、あるインド人学者が関係論
(東京外国語大学教授・国際関係論)